

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 降幡 正志



学位申請者 Elyzabeth Esther Fibra Simarmata
(エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ)

論文名 現代ジャワの若者におけるジャワ語敬語使用の状況

【審査の経過と結論】

エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ氏から博士学位請求論文「現代ジャワの若者におけるジャワ語敬語使用の状況」が提出されたことをうけ、2019年3月12日開催の大学院総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員は、降幡正志（本学総合国際学研究院准教授）を主査とし、青山亨（本学総合国際学研究院教授）、左右田直規（本学総合国際学研究院教授）、野元裕樹（本学総合国際学研究院准教授）、坂本恵（本学名誉教授、日本大学文理学部教授）の計5名の委員から構成された。

各審査委員による論文の審査および2019年5月29日に実施された最終試験の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文の目的は、複雑な敬語体系を持つとされるジャワ語について、実態調査とその分析を通じて、現代ジャワの若者による敬語使用の状況を明らかにすることである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 ジャワ敬語
- 第3章 若者にみられるジャワ語敬語使用の状況
- 第4章 高齢者との比較、若者の敬語使用の変化
- 第5章 終章

第1章では、本論文の研究背景や目的を記したあと、まずジャワ語について、歴史的背景や使用地域、および敬語体系の概略について述べた。またジャワ語

の敬語体系の社会言語学的な側面や、国語・公用語であるインドネシア語との二言語使用の状況について各種文献に触れつつ説明した。それらを踏まえ、社会言語学的観点からの位置付けや研究方法などとともに本論文の構成が述べられている。

第2章では、まずジャワ語の敬語体系がどのようなものであるかについてインドネシア内外の主要な先行研究を精査した。一般に、ジャワ語の敬語体系はンゴコ (Ngoko、いわゆる通常体) とクロモ (Krama、いわゆる丁寧体) に大別され、丁寧さや敬意の度合いに応じてマディヨ (Madya) という中間レベルの発話体やクロモ・インギル (Krama Inggil、尊敬語) などさらに細分化された文体や語彙を使い分けるが、研究者ごとに敬語体系の解釈が異なるため、複雑と言われるジャワ語の敬語体系が整理されておらず複雑に見えるままであることが判明した。続いて、敬語の使用状況に関する先行研究を整理し、それらの中では若者の敬語運用能力が低下していることが述べられているが、どの程度、どのように低下しているかが具体的に論じられていない。筆者は、大学生を対象に実施した認識調査の結果をすでに公表しており、その結論は「敬語の必要性の認識はあるが適切に使う自信がない」「誤使用のリスクが敬語使用回避の要因となる」「簡素化した敬語が出現している」と要約できる。このような先行研究から、若者による敬語の使用状況に関する客観的なデータおよびその分析が必要とされることが明らかとなった。

第3章は本論文の中核をなす部分で、大学生や高校生を対象として実施したアンケート調査の分析を行なった。調査対象者はジョグジャカルタ市にある国立大学の学生 245 名 (ジョグジャカルタ出身者 115 名、他地域出身者 130 名)、および高校生 814 名 (農村部 424 名、都市部 390 名) で、比較の対象としてジャワ語・ジャワ文化の専門家 3 名および高校教師 46 名 (農村部 20 名、都市部 26 名) にもアンケート調査を行なっている。

アンケートの内容は、「○○はソロ (地名) に行く (か?)」「○○ arep lunga ning Solo.!?」のうちの 3 語 (未来相を表す助動詞 arep、動詞「行く」lunga、前置詞「～へ」ning) に敬語レベルによる使い分けがそれぞれ 3 語ずつあり、それらの組み合わせを網羅した計 27 文を作成し、話し手と聞き手および行為者 (「○○」に相当する人物) の関係を考慮した場面を 5 つ設定して、各場面において上述の 27 文のうち自身がどれを使うかを複数回答可として尋ねるというものである。ただし、比較対象としたジャワ語・ジャワ文化専門家と高校教師には、27 文のうちどれが正しいと思われるかを尋ねている。

大学生を対象としたアンケート調査を分析した結果、ジョグジャカルタ出身

者の方が他地域出身者に比べより適切な敬語使用の傾向がみられたが、特に謙讓表現に不適切な選択が多くみられた。さらに、目上に対してでも行為者への敬意を動詞「行く」の使い分けで表す以外は Ngoko を用いることが多いという傾向も見られたが、これは聞き手に対して通常体を用いることで心理的距離が近いことをアピールするものであると考察している。

一方、高校生を対象としたアンケート調査からは、農村部の方が都市部に比べて明らかに規範的な敬語運用の能力が高いが、謙讓表現の適切さについては理解の度合いがいずれも低いことが明らかになった。また、都市部の高校生には相手を問わず通常体 (Ngoko 体) を使用することが多いという傾向もみられた。

なお、大学生と高校生の分析結果を比較すると、大学生の方がより多様な文体を用いることもわかった。

第 4 章では、高齢者に対するインタビュー調査および高校生への家庭での使用言語に関するアンケート調査の分析を行なった。高齢者への調査は非構造化インタビューで 30 名に対して行なったが、このうち回答に 11 のチェック項目がすべて含まれていた 10 名を分析の対象とした。79～91 歳の 7 名と 60～66 歳の 3 名の 2 グループに分けてみると、両グループに共通する回答として「家庭や学校、生活環境で敬語を身につけた」「現代の若者は敬語ができないと思う」などがあつた。一方、79～91 歳のグループは「規範的な敬語使用ができる」「家でジャワ語を使用する」「自分の子供に敬語を教える」と述べたのに対し、60～66 歳のグループは「規範的な敬語使用ができると言い切れない」「家で時々ジャワ語を使用する」「自分の子供に敬語を教えないが会話しながら習わせていく」といったように、世代によって異なる傾向がみられた。この傾向の違いは、インドネシア独立の前後による社会の変化や学校教育における使用言語の違いなどを要因として挙げている。

高校生への使用言語に関する調査は、対象者は第 3 章のアンケート調査と合わせて実施された。この中でとりわけ注目すべき結果として、農村部の高校生のほぼ半数 (49.5%) が「Ngoko 体と Krama 体」つまり家庭内ではジャワ語で会話するのに対し、都市部の高校生は「Ngoko 体とインドネシア語」(37.3%)、「インドネシア語のみ」(30.7%) つまりジャワ語の丁寧体を用いずインドネシア語かジャワ語の通常体で会話する、というものであつた。

さらに、筆者は以前に行なった敬語に関する調査から、若者が敬語使用を避ける一方で、彼らなりの敬語使用の概念を持っていることを指摘した。従来の敬語体系による語や表現の使い分けから、家庭や近所で人々と会話を交わす際

にシンプルに丁寧さを示す「クロモルマ体」(Krama Rumah「家の敬語」)という「新敬語」が現れ、またジャワ語を話す中で Krama の語彙を使う代わりにインドネシア語を用いること(インドネシア語へのコードスイッチング)で丁寧さを保つ「簡素化した敬語」(Krama Sederhana「シンプルな敬語」)もある。上述のアンケート調査にこれらの用語を聞いたことがあるかという項目も含め尋ねたところ、「クロモルマ体」という用語を聞いたことがある高校生は 20.4%であったが、「簡素化した敬語」は 78.6% の高校生が聞いたことがあると答えた。

これらの意識調査を総合すると、高齢者の世代ではジャワ語の敬語体系の中で伝統的な Krama 体を用い、あるいは維持してきたのに対し、若い世代に敬語体系の変化の様子が見られると考えられる。

第 5 章では、これまで述べてきた分析および考察をまとめた上で、今後の課題について言及している。

【最終試験の概要】

最終試験は 2019 年 5 月 29 日 15:00～17:00 に実施された。まず学位申請者が 35 分で論文の概要を説明し、その後各審査委員との質疑応答が行われ、また各審査委員から論文に対するコメントも何点か述べられた。

本論文の内容について審査委員が高く評価できるとした点には以下のようなものがある。

- (1) 従来言われてきたジャワ語の敬語運用能力の低下は具体的なデータを伴わないため客観性に欠けていたが、本論文ではアンケート調査に基づき数値化したことで、若者の敬語運用能力に関してより客観的な議論を提供することができた。
- (2) 1,000 件を超えるアンケート調査はジャワ語を対象としていることを考慮すると十分に大規模であり、かつ回答の分析を丁寧に行なったことにより、分析結果を明確に提示することができた。
- (3) 若い世代に対するアンケート調査のみでなく、彼らへの家庭での使用言語に関する調査や高齢の世代に対するインタビュー調査の結果なども合わせることにより、現代の若者における敬語運用能力の低下とみるよりも新しい敬語のスタイルへの変容という新たな知見をもたらした。
- (4) 付録として分析結果を表すグラフを 150 点以上作成し添付しており、これらは若者によるジャワ語の敬語運用に関するデータとして極めて貴重である。
- (5) 本研究は 2010 年代における若者のジャワ語の敬語使用の包括的な研究ということができ、今後の変化をみていく際の重要な資料となる。

一方、以下のような疑問点や再考すべき点も指摘された。

- (1) 「丁寧」「敬意」「謙譲」など敬語に関する用語の定義が不明確である。日本語における用語を流用しているため、かえってジャワ語の敬語体系の説明があいまいになってしまっている。
- (2) ジャワ語の敬語運用について「規範的」という説明が多くみられたが、「規範」とは何を意味しているのか。論文中で「規範的」と述べている内容の一部は「適切」とした方がふさわしかったと思われる。
- (3) アンケート調査で1つの設問に対して回答の項目が27文あるのは多すぎると思われるが、回答者はまじめに答えていたか。
- (4) 今回の調査に用いた文は、本動詞「行く」の入れ替えが敬意の度合いを示し、助動詞および前置詞の入れ替えが丁寧さの度合いを示すが、その両者の区別が分析に生かされていない。これらを区別して分析を進めることにより、若者の敬語離れの状況がより明確になると思われる。
- (5) 5つの場面を設定して5つの設問を用意し回答を得たわけだが、今回の分析は個々の設問の分析にとどまっている。各設問の相関関係をみる分析も必要と思われる。
- (6) 「クロモルマ体」と「簡素化したクロモ体」の分類がわかりにくい。特にインドネシア語へのコードスイッチングが「簡素化」というイメージとはつながりにくい。
- (7) 「簡素化したクロモ体」としてインドネシア語にコードスイッチングすることが丁寧さを示すことと同義であるとも読み取れるが、コードスイッチングにはさまざまな要因があるので、注意する必要がある。

こうした疑問点や指摘に対する学位申請者の応答は、本論文で明らかにされた点やその限界、今後の課題とすべき点を踏まえた的確なものであった。審査委員からの指摘は、本論文の学術的な価値を大いに認識した上で今後の研究の広がりの可能性を示したものである。

以上、論文および最終試験の審査により、審査委員会は本論文が本学総合国際学研究所博士学位論文評価基準を満たしていることを確認し、全員一致で学位申請者エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であることを判断した。